資料５

第3分科会「郷土教育の推進」議論の骨子（案）～委員意見等の整理～

＜議論の柱(論点)について＞　議論の状況を踏まえ、委員の意見・提案等について、下記の３つの論点ごとに、整理して取りまとめました。

ゲストスピーカーの（株）交通新聞社出版事業部長の中村 直美様(松阪市ご出身)の講演では、主に次の５点のご指摘・提言をいただきました。
1.三重県は南北に長く旧国名も４つ(伊勢･伊賀･志摩･紀伊)、地域が違うと全く違う文化があり、遠くへ行かずとも近場で異文化体験･交流ができる。
2.特に小学生の時期に色々なものを見て、聞いて、動いて体験することが、将来に向けて効果的であり、重点的に体験を通した郷土教育を行うべき。
3.教材「三重の文化」は、例えば県広報への抜粋掲載や、小学生向けにリライトするなどの工夫によって、より上手く活用が図れるのではないか。
4.「美し国かるた(仮称)」は、すぐ完成形をめざすよりも、子どもたちの反応も見ながら、長く県全体に浸透していくものを制作すべきではないか。
5.方言は、時を経て風景が変わっても、覚えていて意味が分かる「その土地らしさ」を感じられる素敵なもので、文化教育の中に取り入れると良い。

論点 1　子どもたちの発達段階（幼保･小･中･高）に応じた、学校における郷土教育の推進

意見集約による議論の方向性の整理 ＝ 議論全体の横串となる考え方

① 特に小学校教育における郷土教育・体験教育には、子どもにとって印象･記憶に残る強いインパクトがあり、その時期の知識や経験が、その後の学校教育における郷土教育の根幹となる。
② 子どもたちが、身近な地域において、様々な体験を、量ではなく質的な面で「本物」に出会い触れる体験を、幼少期～特に小学校における教育カリキュラムの中で出来ることが、将来の人間(アイデンティティ)形成に向けて、大変重要である。
③ 郷土教育の推進においては、知識の習得だけではなく、子どもたちが人や社会とのつながりを実感することで、自発的に地域への興味や関心を持ち、それを継続するという視点が重要である。

【具体的方策の検討に向けた提案･意見】
① 子どもたちの体験教育においては、親子で一緒に行う体験や、異なる年代・学年間の交流、特に幼少の子が年上の子に「つられ体験」する、といった取組も有意義である。
② 子どもが体験に出かけて地域と触れあうことで、子どもを通して地域と家庭がつながるよう、幼稚園・学校は郷土教育の推進を通して、両者のつなぎ役を果たすべきである。
③ たとえば地域の食文化などは、調理実習で学んだり、農山漁村への宿泊、試食を通じて体験してみるなど、学校教育の様々な場面で、郷土教育として取り組むことができる。
④ 中･高校生の職業体験やインターンシップは、キャリア教育のみではなく、子どもたちが自らの郷土の歴史や文化を知り、愛着を育むという観点からも捉えることができる。
⑤ 学校教育の段階ごとに「地域」の捉え方を明確にすべきである。

国際的な視野からみた、特に中学･高校段階における郷土教育の推進

① ＡＬＴ活用による外国語教育を小学校で充実すれば、中学･高校段階での、郷土の国際的な情報発信など、より高度な取組へと発展させられる。
② 地域の食材･食文化は、対外国人も含め、郷土について語り紹介しやすい、人とのつながりを作る上で有用な地域資源である。

論点 2　地域資源や人材の活用

【主な意見（課題や方策検討に向けた提案も含む）】
① 伊賀市は、夏休みに芭蕉施設を親子で回る無料スタンプラリーの仕組みや、市博物館には芭蕉、組み紐、忍者等の映像もある。新県立博物館も含め、施設の有効活用が重要であるが、学校等の単位で訪問できるためのバス等の交通手段の確保が課題である。
② 鳥羽の恐竜化石などは、同様の化石がある福井への体験ツアー等によって、子どもたちは他所との比較を通じて地元の良さを再認識したり、より学問的な関心・興味を高めている。
③ たとえば、松阪や伊賀で盛んな「茶道」なども、地域ごとに特色・違いがあり、同じ道の文化でも、地域によって異なる文化に触れることも、自らの地域への理解を深める上で大事である。
④ 子どもたちに、適切な時期に体験の機会を提供できるために、
・絵など一芸に秀でた人や、多様な経験を持つ有能な退職者等
・子どもたちに対して「糸口」を多く持った資質の高い教職員
・保護者、家庭の理解や協力
の確保･活用が重要であり、地域の人材に対しては、取組に参画しやすい仕組みが必要である。
⑤ 県の学校や教育委員会だけが担うのではなく、市町、他部局との連携も図りながら、郷土教育を展開していくべきである。
⑥ 県が主導的に郷土教育を担う専門人材を養成すべきである。
⑦ 市町への人材配置も含め、各市町が学校を支援する体制が要る。
⑧ 食材や食文化は、郷土を語りやすい有用な地域資源である。

論点 3　教材コンテンツや情報発信

【主な意見（課題や方策検討に向けた提案も含む）】
① 教材「三重の文化」について
ア 全中学生に配布すべきである。自分の子に引き継げる。
ィ 映像版があれば、見て聞いて学べて一層良い。高校生による制作を検討してはどうか。
ゥ 読み手の関心を喚び惹き付けるようなキャッチコピーや、探求心をくすぐるヒントの一文を入れる工夫も良い。
② 教材「美し国かるた（仮称）」について
ア 群馬の上毛かるたに倣って、地域バランスへの配慮よりも後世に伝えたい素材の採用、礼節心得や遊び心をくすぐるルールの説明書きの作成など、を検討してはどうか。
ィ 国際的な視点からは、中学生くらい向けには、英語で説明書きを作成するのも一案ではないか。
③ 子どもたちの体験機会の拡充のため、「本物文化体験」ホームページ等コンテンツの充実、発信･周知が重要である。
④ 中･高校生が、自分が興味を持った素材の動画･映像制作、発信を郷土教育の中で行えれば、面白い試みではないか。
⑤ 一方的な情報発信ではなく、子どもと対話する双方向、子ども同士など多方向で発信し、実践することが重要である。
⑥ マスメディア活用も含め、地域へ積極的に情報発信することで、大人は子どもの関心を知り、人材発掘にもつながる。
⑦ 学校においては、個々教員任せでなく、良い事例等について、教職員間でしっかり情報共有することが重要である。

子どもたちのための「郷土教育」の土台とすべき考え方

○ 一生にわたって自身の精神的支柱、心の拠り所となる郷土への理解・愛着を深める。

○ 国際社会の中で、自信を持って郷土を語れ、発信や対話ができ、活躍できる資質を養う。